

まちあるきの考古学



御津市街地から急崖の海岸線に沿う国道を走ると、やがて港町・室津に着きます。
小山に囲まれた小さな入り江には、多くの漁船と家屋がひしめき合うように並んでいました。

街には、汀線に沿い緩やかに曲がる路地、ひしめき合うように並ぶ二階建ての家屋、近くに迫る山々など、港町特有の風景があります。



1200年以上前からある港には、いまでも数多の遊漁船や漁船が舫で繋がられています。

繋がれた船の向うの丘上には、賀茂神社が鎮座しています。

室津が、賀茂別雷神社(京都上賀茂神社)の御厨であったことから分祀されたといわれています。



賀茂神社 本殿

室津



韓泊

魚住

大輪田

河尻



いずれの泊も、約20kmの距離で配置されています。
これは、陸乗り航法で帆船一日の航程でした。

行基が五泊を整備した理由は定かではありません。
海路整備のため、兵站路確保のため、それとも、東大寺建立のよ
うな大事業のための資材搬入路を整備したのかも知れません。

「摂播五泊」のなかで、江戸末期まで港町として栄えたのは室津だ
けのようです。

南北朝時代、足利尊氏が九州下向する際に寄港したとされ、江戸
時代には朝鮮通信使の停泊所に定められました。
特に参勤交代では、西国大名の多くが海路で室津に上陸して陸路
を進んだため、室津は宿場としても繁栄を謳歌しました。宿場にお
かれる本陣は1～2軒ですが、室津には6軒もあったといえます。

古来より、瀬戸内海路は国土交通の大動脈でした。
風をよみ、潮流にのり、陸地沿いを航行(陸乗り航法)し、夜には碇
泊地に留まるのが古来の航法でした。そのため、瀬戸内沿岸の各
地には「泊」が建設され、港町として発展してきたのです。

延喜十四年(914)の文書に、奈良時代の僧行基が(8世紀前半頃)
摂津国・播磨国に5つの泊(港)、いわゆる「摂播五泊」に言及した
ものがあるそうです。

- ①河尻泊(尼崎市) ②大輪田泊(神戸市兵庫区) ③魚住泊
(明石市) ④韓泊(福泊・姫路市) ⑤室泊(たつの市)

付近のまちあるき 龍野 姫路